

脊椎麻酔・硬膜外麻酔について（産婦人科麻酔の場合）

局所麻酔薬を使用する部分的な麻酔です。意識がなくなることはありません。

脳からつながる神経の束（脊髄）が背骨の後ろを通っていますが脊髄は硬膜という膜で包まれており、硬膜の中（脊髄くも膜下腔）は脳脊髄液で満たされています。

脊髄くも膜下腔に直接局所麻酔薬を注入する方法を脊椎麻酔

硬膜の外（硬膜外腔）に局所麻酔薬を注入する方法を硬膜外麻酔と言います。

脊椎麻酔は通常胸から足先までの痛みをとるために使用します。局所麻酔薬注入後数分で効果が出始め、足先の方からだんだんとしびれてきます。個人差はありますが、3時間から5時間ほど効果が持続します。

硬膜外麻酔は帝王切開の場合はお腹の傷の痛みをとるため、分娩の場合は陣痛の痛みをとるために使用します。硬膜外腔にカテーテルという細いチューブを留置します。

副作用

麻酔薬の影響で効果が持続している間は下半身に力が入らない、尿意が感じられないという症状が出現します。また交感神経をブロックすることで血圧が低下しやすくなり、気分が悪くなり嘔吐することもあります。

合併症

頭痛：脊椎麻酔を行った場合や硬膜外腔にカテーテルを入れるときに硬膜に穴が開き、その穴から脳脊髄液が硬膜外腔に漏れることにより生じると言われています。上体を起こすことで頭痛や吐き気が出現します。安静や痛み止めで対処療法を行いますが、完全に治るのに1週間から1か月くらいかかる場合もあります。

神経障害：脊椎麻酔による針、また硬膜外麻酔のカテーテルが近くを走っている神経に触れることにより起こる場合があります。通常は一時的なもので時間がたてば元に戻ります。

血腫・膿瘍：非常に稀な症状ですが、硬膜外腔や脊髄くも膜下腔に血液のかたまりや膿がたまって神経を圧迫することがあります。そのままにしておくと神経障害が残ることがあるため、緊急手術を行い血液や膿を取り除かなければならない場合があります。

脊椎麻酔・硬膜外麻酔ができない方

緊急事態や十分な準備を行う時間がない場合

血液が固まりにくい場合

大量出血や高度な脱水がある場合

背骨に高度な変形がある場合、背中の神経に病気がある場合

局所麻酔薬アレルギーなど

長野産婦人科